二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

鋼鉄闘姫 ZERO 陵辱のエクソダス

小説 羽沢向一
挿絵 高浜太郎

第一章　逃亡者ラン　006
第二章　悦びをくれる少年　048
第三章　正義の味方ミリオン　105
第四章　戦闘姫の支配者　126
第五章　黒と白の被虐者　176
最終章　わたしたち　225

登場人物紹介

Characters

ラン

悪の組織＜黒い翼＞の幹部として、戦闘装甲を身に纏い破壊活動を繰り広げた戦闘姫。今は自由の身となり、流浪の旅を続けている。

耀（よう）

ランが組織脱出時に出会った少年。記憶を失っておりその正体は不明。

ケイ

＜黒い翼＞時代のランの仲間。新生＜黒い翼＞の一員として再びランを呼び戻そうとする。

ミリオン

ランが女幹部時代に死闘を繰り広げた正義の味方。新生＜黒い翼＞とランの闘争の中で再び姿を現す。

ジュニア

ランたちの前に姿を現した新生＜黒い翼＞の総統。

『第二章　悦びをくれる少年』より

耀はペニスを勃起させていた。
信じられない膨張率だ。
普段の耀のモノは、十三歳くらいに見える外見と、なにより繊細な身体つきにふさわしく、小さい。皮もしっかりと先端までかぶっている。
はじめて見せる耀の勃起は、普通の大人のサイズを陵駕していた。まっすぐ上へ向かってそそり立った怒張ペニスの先端は、へそを越えている。余裕のあった包皮は勃起の勢いで完全に剥けて、赤熱色に染まった亀頭を露出させた。
自らの存在を堂々と誇示する巨根とは対照的に、その持ち主である耀の表情は混乱していた。
「ランさん、ぼくのがいきなり勃っちゃって……熱くてたまらないんです。ぼくのペニスが燃えてるんです」
「今までに勃起したことはないのか」
「こんなこと、はじめてです。前にはあったのかもしれないけど、ぼくの個人的記憶は、ランさんに拾われたときからしかないから」
そう語る間にも、耀の下半身は炎と化した勃起の勢いに突き動かされて、細い腰をカクンカクンと前へ揺すっている。今にも破裂しそうにふくれあがった亀頭が前後に振れて、自分の腹に何度も当たった。
いつも涼しげな顔が朱色に塗られて、汗が浮かんでいる。天才彫刻家が白大理石から掘

り出したような胸や腹や背中にも、汗の玉がいくつも貼りついた。
「ランさん、どうにかしてください！」
「どうにかって……どうしろというのだ……」
ランはどうしてよいのか、わからなかった。戦闘姫としての破壊活動の毎日に、肉欲が入りこむ余地などなかった。戦闘姫になる以前には性体験があったかもしれないが、耀と同じく記憶を消されている。自分が処女なのか、あるいは非処女なのか、それも不明だ。一般常識としての性の知識はあるが、ペニスを屹立させる耀を前にした行動には結びつかないのだ。
「ランさん、お願いです」
アイスクリームを忘れたランへ向かって、耀は足を進めた。さして広いとはいえないモーテルの客室で、激烈な勃起をもてあます少年と対峙したランは、高い熱気を感じた。未知のエネルギーが耀の肉体からあふれ出して、ランの身体を包みこみ、侵蝕してくる思いがする。
また一歩、耀が足を前に出した。アイスを離したランの手が、濡れた肌に触れそうになる。
「ぼくの中でマグマのように渦巻いているものを、ランさんの手で外へ導き出して欲しいんです」
「わたしに射精させろということなのか」

「そうです、ランさん」
「そんなことは自分で処理を、う……」
ランの指に、熱い亀頭が触れる。ジュッという音が、自分の手から起きた気がして、思わずベッドの上を背後へ退いてしまう。耀がタイミングを合わせて前へ進んだので、亀頭が離れるどころかさらに強く手に押しつけられた。
「な……や……」
亀頭だけでなく、勃起ペニスの裏側全体が手に密着する。自分自身の反応に驚き、ランは身を寄せてくる耀の顔をにらんだ。
耀も熱っぽい瞳で、ランの視線を受け止めた。
「ランさん」
「耀、いつもと違う」
と、ランは思いを口にした。さっきまではとまどって泣きそうだった耀の顔が、膨張した亀頭を女の手に押しつけたときから、別のものに変化している。
少女として通用する顔に、力があった。この十日間はランの言葉に従順にしたがい、意見を言うときも控えめだった耀の顔に、威厳ともいうべき力がみなぎっている。
「ランさん、手でぼくのに触ってください」
「も、もう触れてる」
「もっときちんと、しっかりと触ってください」

口調は変わらずていねいだが、命令には抵抗し難い威圧感があった。ランは頭で考えるよりも先にベッドから下りて、床にひざまずいていた。レザーシャツの胸の前に、勃起力の勢いで前後に揺れるペニスが硬くそびえている。

「早く、触って」

声は頭上から聞こえているのに、ランはペニスに、いや、熱く息づく亀頭に命令されている錯覚におちいった。

（これは、なんだ？　なぜ、わたしは耀の前にひざまずいている？）

総統ゴードのテレパシーに従属していたときのことが意識に浮かぶ。だが脳のテレパシー器官は活動していないのもわかる。耀のただの声が力を持って迫ってくるのだ。

ランの中で、いまだかつて感じたことのない感情が湧いた。改造室で戦闘姫として目覚め、総統ゴードに忠誠をつくす毎日には、ありえなかった感情。そんな感情が人間にあることすら忘却していたもの。

男の肉体への欲望。

渇望と呼んでもいい。女なら持っていて当然のものだが、自分の脳からは除去されていると考えていたものだ。

実際には失われてはいなかった。ただ脳の奥底に封印されて、表に出てこなかっただけだ。

（耀の勃起を見て、脳の眠っていた部分が目覚めさせられたのか。わからない。わからな

いが……）

自分が口にすると思わなかった言葉を、眼前の耀の肉のシンボルへと告げた。

「……欲しい」

「ランさん、してください」

耀の言葉に、もう首を縦に動かすしかない。

数えきれないほど人体を破壊してきた両手を、人見知りする子供のようにおずおずと前へ出した。息を吹きかけただけで壊れる精緻な氷の彫刻に触れるように、指先で左右から亀頭を挟む。

「ああっ！」

耀が小鳥のような声をうわずらせて、身体を震わせた。ただ当たっているのと、思いをこめて触ってもらうのでは、まったく感覚が違う。ペニスが跳ね上がり、ランの指の間からはずれてしまう。

ランも思わず声をあげた。

「あっ、待て」

たいせつなモノを逃がすまいと、勃起を強くつかむ。

耀の喉から鮮烈な快感を訴える声が飛ぶ。

「あひいっ！」

一度触れられただけで、男根は感度を大きく増していた。耀は想像以上の強い刺激を受

けて、驚きと悦びで瞳に涙がにじんだ。
ランもまた、両手で耀を握ってから、自分のしたことに驚愕している。掌に伝わる熱さと硬さに心臓が高鳴った。指の中で、さらに亀頭の大きさが増しているように思えて、自然と吐息が洩れた。
「ああ……」
（……勝てない）
ランは思い知らされた。戦闘装甲を鋼着しなくても、自分は強い。通常の人間ならば、プロの武術家でも指一本で殺す確信がある。その自分が、少年がいきり立たせるたった一本のペニスに敗北を喫した。
（わたしは、耀のコレには逆らえない）
「どうすればいい？　どうすれば、耀は満足するんだ？」
「こすってください。ランさんの手で、ぼくのをこすって」
「わかった」
ランは指をやさしく動かすことに細心の注意を向けた。気を抜くと、湧きあがる昂りに呑まれて、亀頭を握りつぶしてしまいそうで怖い。
「こうすればいいのか」
左手でペニスの幹をつかんで固定すると、右手の指の腹を亀頭のなめらかな表面ですべらせた。

「ふああっ！」
耀の全身が大きく震えた。はじめて施される本格的な手の愛撫の快感は、目覚めてからほんの十日の少年の予想をはるかに超えて凄まじい。手足が痙攣して止まらなくなる。
「あああああっ！　も、もう、ランさん！」
耀の細い四肢から力が抜けた。思わずランの頭に両腕をまわして、崩れそうな身体をようやく支えた。
はじめて性欲を発現させた耀の身体は、限界までふくらんだ水風船だった。ランから与えられたわずかな刺激が、針のひと突きになる。
「あああ、出る！」
最初の衝撃が、耀を襲う。精巣から決壊した白い洪水が、狭い尿道に殺到して、少年の性感を責めたてる。自分では制御できない快感をともなって、亀頭の先端から白い体液がどっと噴出した。
「うあああ、出てる！　ぼくのが出ています、ランさんっ!!」
ランの鋭い耳は、びるびると鈴口を鳴らす射精音を聞いた気がした。
握られたままの男根から、熱い白濁粘液が壊れた蛇口のような勢いで飛びつづける。ランもはじめて射精を目の当たりにして、手を離すのも忘れ、額に精液を浴びせられて、熱い声をあふれさせた。
「あ、はああ……」

「あああああっ！」

耀の射精は正常な男の放出量を超えても、まだ止まらない。愛らしい顔を引きつらせ、左右に振りたくりながら、ランの顔からレザーシャツの胸までを白く塗りつぶしていく。

ランは喘ぎながら白い奔流を浴びつづけた。はじめて知る恍惚感が電流となって、強化された裸身を頭から足の先まで駆けめぐった。とくに胸と下腹部から股間に電流が集中して、体内からの熱で火照らされる。

「ああ……あああ、身体が溶けそうだ……こんな感覚があったなんて……」

戦闘姫として思うままに腕力を振るう爽快感とは正反対の、身体の奥へ奥へと沁みこんでくる気持ちよさだ。素肌とシャツの区別もなく精液を浴びた部分から、皮膚も筋肉もどろどろに蕩ける思いがする。

戦闘姫の鋭敏な五感のすべてが、少年の排出液に魅せられている。固形に近い精液が頬を流れて、どろりとした肌触りで触覚をやさしくさすられる。今までに嗅いだことのない濃厚でみずみずしい匂いが、嗅覚に充満する。唇からアイスクリームよりも甘美な味が沁み入って、味覚を刺激される。聴覚すらも、精液が顔に当たる音を反芻した。

室内の壁の鏡には、ランの顔が映っていた。自身の精液まみれの姿を目にして、心が揺れた。

（こんな顔を、耀はどう思うだろうか）

その思いが、さらにラン自身を驚かせた。

（わたしが他人に容姿をどう思われるか、気にしている！　そんなことは、今まで考えたこともなかった）

当惑するランの耳に、耀のせっぱつまった声が入った。

「ランさん、ぼくはまだおさまらないんです。いえ、もっとひどくなっています。さっきよりも、もっと、強く、いっぱい、ぼくのペニスを！」

耀が亀頭を、ランの鼻先に突きつけた。通常の何倍もの量を吐き出したというのに、勃起はまったく萎えていない。むしろ一度射精の快楽を知ってしまったために、いっそう勢いを増して燃え狂っている。

ランはたまらず息を呑んだ。亀頭がビクビクと動き、鈴口から余韻の精液の滴が垂れるのを凝視していると、顔や胸に付着した少年の白い体液の薫りをより芳醇に感じられた。

目の前にあるモノの愛しさに、胸が張り裂けそうだ。

（ひとつになりたい！）

ランの脳内で欲望が火花を散らした。

（耀のモノとひとつになりたい！）

ランは本能の命じるままに口を大きく開いた。戦闘姫として脳に植えつけられた知識には、性の技巧などない。キスや舌を伸ばして舐めることなど思いつかず、いきなり亀頭にかぶりついた。

「んぷっ」

亀頭の大きさと熱さで、口内の敏感な神経が圧倒される。息苦しさを超えて、耀の分身に口を満たされる悦びが、身体を支配した。
「うあっ！　ランさんの口の中、気持ちいいです！」
耀が反射的に腰をせりだし、ランの口を突き上げた。たくましい亀頭が、喉の粘膜を何度もえぐる。
「うぐうっ！」
ランは喉を突かれる苦しさに責められながらも、もっと強く充足の悦びを得ようと、強く息を吸い、頬の内側や舌の表面を亀頭に密着させる。鈴口から吸い出された耀の体液の味と匂いが、苦痛を超えてランの細胞をじっとりと潤ませる。息苦しささえも、耀と結ばれる喜びをかきたてた。
自然と右手が肉幹を上下にさすり、左手が睾丸をいじっていた。口内では唯一動かせる舌で、圧倒的な存在感を示す亀頭の表面を這いまわる。いっぱいに開いた唇の端から、濡れた吐息と舌音が混じった音がこぼれた。
「んっ、んふっ……んじゅ、うちゅう……」
「あああ、ランさん、気持ちいいです！　舌も、手も、たまらないですっ！」
未熟ながらも口と両手を総動員した愛撫を受けて、耀は快感の大波にさらわれた。全身が男性器に変化して、ランの手と口に抱きしめられている思いがした。自分の身体が自分のものではなくなったかのように、未知の歓喜の境地へ飛んでいく。

『第五章　黒と白の被虐者』より　その１

「わたしの戦闘装甲が言うことを聞かない！　どうして！」
　ジュニアがベッドから跳び下りて、冷蔵庫から塩分無添加の野菜ジュースのペットボトルを出した。赤い液体をぐびぐびと飲んで、彫像のようになったランとミリオンを楽しくながめる。
「そいつはそういうふうに、俺が造ったからだぜ。簡単に言っちまうと、ミリオンは気づかないうちに、人格移植装置から暗示を受けていたのさ。新型の戦闘装甲を使って、ランとともに反逆するようにな。その新型の戦闘装甲は、俺が外から操れるんだぜ。ま、ちょっとした実戦テストというところだな。たとえば、こんなこともできるぜ」
　ジュニアが両手をオーケストラの指揮者みたいに掲げた。空中に透明なキーボードが存在するかのように、すばやく指を動かしはじめる。よく見ると、両手にはごく薄い手袋をはめていた。この手袋が指の動きを読んで、二つの戦闘装甲に伝えているのだろう。
　ランとミリオンの身体が歩きはじめた。主人の命令を拒否しつづけていた戦闘装甲がスキップを開始した。軽やかなリズムに乗って、黒と白の装甲が両手を前後に振り上げ、膝を高く上下させる。当然、中に入った二人も同じ動作をするしかない。人間が装甲にあやつられてしまうのだ。
（くそっ。なんということだ！）
　ランはジュニアへ罵声を浴びせそうになったが、歯を食いしばって声を押さえた。なにをどなっても、ジュニアを楽しませるだけにすぎない。

「そーら、楽しく、陽気に、スキップスキップ！」
ジュニアのかけ声に合わせて、と見えるが実際には合わさせられて、ランもミリオンもいかにも楽しげなステップを踏んで、司令室をまわらされる。ランにとっては、記憶にあるかぎりはじめてのスキップだ。
二人はばらばらに司令室を跳ねまわってから、ジュニアが座るベッドの前で向かい合わせに立たせられた。それを合図として、天井から金属の触手が何本も伸びて、ランとミリオンの手足に次々と巻きついた。ともに両手を水平に広げて、十字架に磔にされたポーズを取らされる。
「二人とも、戦闘装甲を自由にしてやるぜ」
ジュニアの言葉の通り、ランとミリオンは戦闘装甲のコントロールが回復するのを感じた。だが触手を切断しようとしても、緊縛された手足はわずかに揺れるだけで、自由にならない。ランの計算では簡単にちぎれるはずの金属触手がびくともしないのだ。
（力が増幅されない！　増力機構が働いていないのか。これではただ鋼鉄の鎧を身にまとっているのと同じだ）
ミリオンも白い姿をもぞもぞとよじらせるだけで、ますます触手にからみつかれるばかりだ。純白の戦闘装甲も増力機構が失われて、ただのハリボテと化している。
「さあ、みごとにひっかかったマヌケ面を見せてもらうぜ」
ジュニアが指を鳴らした。手袋のためにキュッと摩擦音が聞こえる。

今度は同時に、黒白のマスクが割れた。床に落ちるのではなく、分解して金属片の群れとなって舞い上がり、ジュニアに飼われるペットのようにベッドの上に着地した。黒いストレートの長髪と栗色のふわふわした髪が広がり、ランとミリオンは互いの素顔を見つめ合う。

「もうしわけありません、ラン。わたしの調査が不足していたために、こんなことに」

「あやまるな。そんなことより」

ランはマスクから解放された首を動かし、ジュニアをにらんだ。いつもは冷徹な瞳が、火を噴きそうに熱い。

「耀はどこだ」

「心配ねえ。呼んでやるぜ」

ジュニアが左手をひらりと動かすと、司令室の床の一部が丸くスライドして、円形の穴を空けた。舞台のからくりのように、床下からなにかがせりあがってくる。

最初に見えたのは、炎のように赤く尖った髪だ。ケイの顔が現れ、つづいて耀の朱色に染まった顔が出てきた。

「耀！　おまえたち、なにをしてるんだ！」

飛び出すランの叫び声に、ケイ、カヤ、リズの三人はそろってクスクスと悪意のこもった笑いをさえずらせた。

「あら、ラン。見ての通りよ」

「耀様を歓待申し上げて」
「いるネ」
三人の戦闘姫の声にかぶさって、少年の熱をはらんだ声が揺れた。
「ランさん！　あ、あうっ……」
耀は、ケイの上に乗っていた。
正確には椅子に腰かけたケイの膝の上に、耀は乗せられていた。ケイが戦闘装甲のマスクを解除して、首から上だけを見せているのに対して、耀は全裸だ。両手を後ろ手に縛られ、両脚はほとんど水平に広げられて、ケイの足の左右に垂れている。耀の色白で華奢な裸身が、ケイの禍々しい戦闘装甲の上に座らされているだけでも痛々しい。
ぐったりと力を失った耀の裸体の中で、ペニスだけが雄々しくそそり立ち、細い肉体にそぐわない長大な巨根を誇っている。肉の幹には、背後からケイの鋼鉄の手がまわって、十本の金属の指で上下にしごかれつづけていた。
さらに耀の左右には、同じく首だけを出した戦闘装甲のカヤとリズがひざまずき、かつて殺戮をくりかえした手を、やはり少年の急所へ這わせている。カヤの鉄の手が、パンパンにふくらんだ亀頭全体を磨きあげるようになでまわした。リズの力強い指が、精液を休みなく製造する睾丸をやわやわと揉む。
「……あああ、ランさん、ううっ！」
からみつく六本の硬い手に無理やりに刺激されて、耀は何度もケイの膝の上で腰をせり

あげてしまう。そのたびに自分から亀頭を鉄の手にこすりつけることになり、さらに冷たくも熱い快感が発生して、全身をのたうたせた。
「あああ、ランさん……んんん……」
いつもランを責めてくれる少年とは思えない、弱々しい喘ぎ声だ。いったいどれほどの時間をかけてペニスを嬲られつづけているのか、ランには想像もできない。
「やめろ！　耀から離れろ！」
ランは姉妹たちに跳びかかろうとしたが、戦闘装甲と手足を拘束する金属触手がこすれ合って、不快なきしみをたてるばかりだ。
「いいじゃない、ラン」
「耀様も喜んでいるのだから」
「何度も射精しているネ」
リズが一段と強く、睾丸を握りしめた。
耀の顔が引きつり、大きく開いた口の中で舌が閃いた。のけぞった喉から悲鳴がほとばしる。
「くあああああああっ！」
男の急所がつぶされるかと見えた瞬間、耀の腰がひときわ高く跳ね上がり、カヤの指の間から白い粘液が高々と噴きあがった。
「出るっ！　出るううううっ!!」

通常の成人の何倍もの量の精液が高い放物線を描いて、ケイの鋼鉄のつま先の前に落ちた。そこには何回分の射精かもわからない、大きな白い水溜まりができている。
「総統ジュニア様が、耀様は何度でも射精できると言われたから」
「どれだけの量が出るのか」
「実験しているネ」
そう言いながら、三人は射精したばかりのペニスと睾丸を強烈に愛撫しつづけた。ジュニアの言葉を裏打ちするかのように、耀のペニスはいまだにまったく衰えを見せず、本人の意思に反して次の射精への準備に余念がない。とぎれることのない射精強制愛撫の猛威にさらされて、耀の顔だけでなく裸身全体が赤く染まってきた。
ランは自分の中から、重要なものがえぐり取られる思いがした。魂というものが実在するならば、耀の射精とともにザクザクと削ぎ落とされている。
「やめろ！」
自分を拘束するいまわしい戦闘装甲の中で、強化された筋肉をはちきれんばかりにわななかせる。だが緊縛された身体の揺れ幅がわずかに大きくなっただけだ。
「ジュニア、おまえは耀を兄弟だと言ったはずだ。こんなことをして、なんのつもりだ」
ランの怒声に、ジュニアの嘲笑が重なった。
「確かに、俺と耀は兄弟だぜ。だからって、なかよくする必要はねえ。総統ゴードの後継者は、俺ひとりで充分だ」

「耀はもとから総統ゴードの後継者になるつもりはない。耀を自由にしろ」
「耀は必要ねえが、耀の知識が必要なのさ。総統ゴードの知識は、テストとして後継者候補に分散して与えられた。早い話が、俺は総統ゴードの知識の大部分を持っているが、普通の女を戦闘姫に改造する知識がねえんだ。おかげで戦闘姫を増やせない。本部に残ったデータを漁ったら、戦闘姫製造の知識は耀の頭に収まってるとわかった。耀本人は思い出してねえが、ああやって刺激を与えていれば、そのうち覚醒するさ」
「そんなくだらないことのために、耀を辱めているのか！」
「ちょっとちんちんをこすってるだけじゃねえか。耀のちんちんが、自分以外のものになるのが、そんなにいやなのか？　ちんちんならこの司令室にもう一本あるぜ」
「うるさい！　誰がおまえのモノなど」
「俺のじゃねえ。もう一本、意外なところにあるんだぜ」
「ふざけるな。男は二人しかいない」
「誰が、男のちんちんだと言った。なあ、ミリオン」
ミリオンの可憐な顔に、猛烈な嫌悪と恥辱の色が塗られた。主人の恥ずかしさを訴えて、装甲が甲高いきしみを発する。
「やめて！　ランの前では絶対にいや！」
誰よりも強かった正義のヒーローは、必死に唯一自由になる首を左右に振り、栗色の髪をはためかせる。ついさっきの倉庫で見せた強い意志が、粉微塵に打ち砕かれていた。

「ミリオン、どうしたのだ」
ランの言葉に、ミリオンの顔色が青くなる。
「いえ、わたしは、ああっ！」
ミリオンにからみつく触手の一本が、装甲のなめらかな表面を這い進んだ。ウェストを巻き、下腹部を滑り降り、触手が股間を守る装甲に触れた。接続端子を挿しこむように、金属触手の先端が垂直に股間につながる。
「あああああっ！　いやあっ！」
手足を縛られた身体が、ガクンッと股間を前へ突き出した。下半身を何度も前後に動かしながら、暴漢を前にして命乞いをするごく普通の少女のように首を左右に振りつづける。
「いやっ！　いやいやいやあ！　それだけは、ランに見せないで！」
ランの脳裡に、自身のおぞましい体験が甦った。ミリオンの乱れぶりを目にするだけで、自分の胸の内側で疼きが走り、乳液が沸騰する気がした。
「ミリオン、快感パルスを流されているのか！」
ランの言葉は、ミリオンの耳に入らない。腰の動きは前後だけでなく、左右にも激しくうねり、愛らしい顔を苦痛とも快楽ともつかない表情で引きつらせる。頭が何度ものけぞった。唇の両端から二筋の涎が流れて、自身の装甲を濡らしてしまう。
「ああっ、あふううんん、ああ、いや、あくうっ！」
ひときわ強く腰を前に突き出すと、いやな金属音が響いて、触手が接続されている装甲

が楕円の形に剥がれた。そこはまさに女の肉体の中心だった。腰を覆う装甲の真ん中に、白く薄いボディスーツが密着した恥丘のふくらみが現れる。
快感パルスの犠牲になった恥丘は、内側から大量の体液をあふれさせていた。変色したボディスーツがぴっちりと肌に貼りつき、肉唇の形と秘裂の筋を浮きたたせている。
そして、奇妙なものがあった。
ボディスーツの恥丘の上端が、不自然に盛り上がっている。まるでピンポン玉を入れたようだ。ランは思わずたずねてしまった。
「それは、なんだ？」
ミリオンが口を閉ざすかわりに、右足にからみついていた別の触手が、また蛇のように太腿を這い上がってくる。今度は先端が装甲ではなく、白いボディスーツに直接押しつけられる。それも不思議な突起に、強引にめりこんでくる。
「ひいあああああっ！」
装甲を失ったためにいっそう強烈になった快感パルスが、女のもっとも官能深い部分から全身を貫いた。
ボディスーツにも変化が起こった。ランの黒いボディスーツと同じに、ミリオンの股間部分が縦に裂け、恥丘全体が露出する。強固な鋼鉄の中に、女の肉体の中でももっとも繊細な部分が覗いている姿は、あまりに淫靡な光景だ。
さらけだされたミリオンの秘密の部分は無毛だった。少女のように、ランたち戦闘姫と

同じに、陰毛が生えていない。やはり戦闘姫の肉体改造術はミリオンの父親のものなのだろう。

本来存在しているべき陰毛がない替わりに、そこには存在するはずのないものがあった。

ペニスだ。

サイズは幼稚園児程度で、完全に包皮をかぶっているが、間違いなく男性器だ。男にしかないはずのものが、女性器のクリトリスの位置から生えている。

ボディスーツが開いた途端、押さえつけられていた拘束がなくなったことを喜んで、小さいながらも勢いよく亀頭がそりかえる。腹を覆う装甲にぶつかり、ぴしゃっと音をたてた。

「きゃん！」

下腹部で起こった衝撃が、ミリオンに悲鳴をあげさせる。大きく引いた腰がガクガクと震え、足が内股になった。

「あ、あああ……うう……」

子供の親指サイズの男根は、ミリオンの意志に反して、新鮮な外気に触れられたことを祝って、自らズキッズキッと鮮烈な疼きを発している。第二の心臓のように亀頭が脈打つたびに、熱い電流がミリオンの神経を走り、脳をジリジリと炙った。

「あああ、いやあ」

ランも驚愕して、ミリオンの下半身を凝視した。同じ強化改造を受けている自分たち戦

闘姫の身体には、もちろん男のモノなど生えていない。
「それは、いったい」
「ああっ、見ないで！　ランには見られたくない！」
ミリオンは顔を真っ赤にして、わなわなと身悶えた。どうにかしてペニスを隠そうとするが、手も足も金属触手にはばまれて磔のまま動かせない。ただ風に煽られる枯葉のごとくゆらゆらと揺れるだけだ。ミリオンの動きに合わせて、亀頭も前後左右に揺らいで、装甲にピチピチと当たり、かえって存在が強調される。
最強を誇ったヒーローが羞恥に苦悶する姿を、ジュニアがせせら笑った。
「ミリオンはおもしろい身体をしているだろ。だが驚くのはまだ早いぜ。ミリオンのちんちんはまだまだそんなもんじゃねえ」
ボディスーツを開かせた金属触手が小勃起に巻きついた。ミリオンの口から悲鳴がほとばしる。
「ひいいいいっ！」
白い装甲の全身がのけぞり、はからずも触手に巻かれたペニスを、ランへ向けて突き出す姿勢になった。ランの目にも、勃起に快感パルスが注ぎこまれているのがわかった。
（あのペニスはクリトリスが変化したものなのか。そんなところに直接快感パルスを流されたら、いったいどうなってしまうのか）
想像しただけで、ランの身体にも戦慄が走る。膨大な肉悦の洪水に溺れて、脳細胞が破

裂しても不思議はないと思う。
事実、ランの想像でも追いつかない衝撃が、ミリオンの全身を何度も貫いていた。
「あひいっ！　はやあああああっ！」
もとよりじれったい疼きを発する勃起に、細胞のひとつひとつを焼く刺激が流される。竜巻に巻かれたように、ミリオンの不自由な身体が激しく揺れまくった。
「はうう、あおおぉおぉおおう！」
ペニスの勃起が、一段ときつくなった。熾烈な快感パルスを栄養源として、驚異的な膨張率を発揮する。目を見張るランと、猛烈な快楽に瞳を潤ませるミリオン自身が見つめる前で、凄まじくペニスが肥大していく。ミチミチと肉の鳴る音が聞こえる勢いで、長さも、太さも、倍加する。
二人の視線を浴びて、ミリオンのペニスは幼稚園児サイズから、大人の男をも陵駕するボリュームにまで急成長した。耀のモノと比べても、勝るとも劣らぬ巨根ぶりだ。
「あああああ、む、む……」
剥ける、とはミリオンは言えなかった。ひとりならつい口にしたが、ランの前では恥ずかしすぎる自身の状態を表す言葉を口に出せない。
先端を包んでいた肉の皮が、ひとりでにめくれ下がって、赤く色づいた亀頭が完全に露出する。パンパンにふくれた亀頭は淫猥な熱波を発して、清楚なミリオンとは対照的な快楽への貪欲さを表した。

ペニスに巻きついていた触手は、勃起の成長とともに肉幹を這い登り、何重にも巻きついた。触手と接触する面積が増えるにしたがって、さらに快感パルスを浴びせられる量が大きくなる。

「あああああ、だ、だめ！　だめだめだめ！」

ペニスの成長が止まると同時に、ミリオンの身体がビクンと跳ね上がった。悲鳴が絶叫になる。巻きついた金属触手の下で、尿道がむちむちと盛り上がっていく。

「だめええっ!!」

赤熱する亀頭の先端で、鈴口が丸く広がった。

びゅりっ！　びゅりるるっ！

濡れた破裂音が轟き、白濁した粘液の塊が鈴口から飛び出した。濃厚すぎて固形に近い塊が、続々と鈴口を広げて打ち上げられる。

「だめええええっ！」

同じ言葉をくりかえし、何度も腰をせりあげて、大量の精液を噴火させつづけた。

唖然とするランの顔に、マシンガンの連射のように次々と精液の塊がぶつかった。顔面に激突した精液が飛び散り、白い飛沫が黒い装甲や周囲の床に斑点を描く。顔をぬぐいたくても、手を動かせない。

「ああ、ああああ……」

長い射精をようやく終えたミリオンは、恥辱に歪んだ顔をがっくりと伏せた。ペニスの

ほうは逆に満々とそりかえり、大量射精をしても衰えをまったく感じさせない。
「驚いただろ。ミリオンは父親から特別の強化改造を受けてる。その副作用が、女の身体に生えたちんちんなのさ。普段は体内に収納されているが、戦闘をすると勝手に勃起する。おまえたち戦闘姫と殺し合いをした後で、ミリオンはひとりでシコシコやっていたんだぜ。最高に笑えるだろ」
ランは手でぬぐう替わりに、犬のように首を振って顔から精液を飛ばすと、嘲笑するジュニアをにらみつけた。
「黙れ。おまえにミリオンの闘いをどうこう言われる筋合いはない」
「は、拳をぶつけ合った友情というわけか。ミリオンも、ちんちんのことをランに知られるのを一番いやがっていたからな。ま、くだらねえ。それなら二人でなかよくしてもらおうじゃねえか」
ジュニアがまた両手で指揮をはじめる。
金属触手がざわざわと蠢き、ミリオンの身体が床に引き倒された。尻の装甲と硬い床がぶつかり、金属音をたてる。さらに両脚が左右に割り広げられ、床上に下半身でMの文字を描かされた。何時間か前に、ランがミリオンの手によって無理強いされたポーズだ。Mの中心には、高々と屹立するたくましいペニスと、射精の余波を受けて女蜜を滴らせている肉唇がある。
「それ！」

ジュニアの左手が、人差し指をひと振りした。
ランの戦闘装甲の股間を守る部分がはずれて、恥丘を包む黒いボディスーツが現れる。すぐさま触手の一本が獲物を追う蛇のように降りてきて、ボディスーツのちょうどクリトリスの位置に貼りついた。
（まさか、わたしも⁉）
胸から乳液が出ることを知らなかったように、自分もペニスが生えることを知らないだけなのではないか、と疑念が走る。不安に満たされる肉体に、快感パルスがたたきこまれた。
「あああああああっ！」
触手に血管を吸引されているように肉芽にどくどくと血液が集中して、一気に立ち上がった。幸いにもというべきなのか、ペニスへと成長することはなかったが、強烈な愉悦の火花がはじける。触手にからみつかれた全身が、洪水に翻弄される小魚のように揺れる。
「あひいっ！　あああおううっ！」
股間から触手が離れると、ボディスーツが左右に開いて、秘唇の中心からどぷっと愛液が流出した。両脚の黒い装甲の表面を、透明な体液が覆う。
ランも全身を固める装甲の中に女そのものの部分が覗くという、奇怪な艶めかしさをかもしだす姿にされた。ミリオンと淫猥なおそろいだ。
ランは、ジュニアの意図に気づき、まだ精液が残る顔の色を変えた。

『第五章　黒と白の被虐者』より　その２

ランの身体をはねとばす勢いで、亀頭を子宮へ向かって突き立てる。
ミリオンの渾身の一撃を、ランも強烈な肉壁の収縮で受け止めた。
「くう、す、すごい！」
「出ちゃううう!!」
自分の手でペニスをしごくよりもはるかに大きな悦楽が、ミリオンに津波のように押しよせる。射精のスイッチが瞬時に焼き切れて、猛烈な勢いで精液が暴れ狂った。
一度ではなく、二度三度と連続してスイッチが入り、射精数回分の精液がひとつの塊になって、狭い尿道を猛進した。今までにないペニスの内側からの圧迫感に快感神経をえぐられて、ミリオンをいつもよりもさらに高く飛翔させた。
「あああ！　出るう！　精液、出ちゃううううあああああっ!!」
亀頭が爆発する勢いで、精液がランの体内へ噴出した。ランの中に射精して射精して射精しつづける。とても膣の中に入りきらず、逆流した精液がミリオンの下半身をどろどろに濡らした。
ミリオンからの凄絶な大射精を受けて、ランの肉体もはるか彼方へと飛ばされた。騎乗位のまま背中をのけぞらせ、乳房から噴きあがる二筋の乳液を四方へ飛び散らせた。膣と双乳の絶頂が反響して、何倍にも増幅して襲ってくる。
「ミリオン、おおあ、ミリオンのが、ああ、イクッ、イクイクイクうっ!!」
自身の黒い髪と、黒い戦闘装甲と、黒いボディスーツを乳液で白く濡らして、ランは全

身を痙攣させた。膣内のミリオンの肉棒は大きく勃起したままで、新たな肉の歓喜の燃料を次々と流しこんでくる。

二人ともに息も止まる絶頂の余韻に漂っているときに、ランは背筋に氷の刃を突き立てられたような戦慄を感じた。

カリッ。

カリカリカリ……。

カリリリリッ！

(聞こえる……聞こえる。大きくなっている)

カリリィ。

カリカリカリカリカリカリィィィィ！

ノイズは高くなり、低くなり、音色を変えたが、確実に大きく耳障りになっていた。

(ジュニアのテレパシーが、わたしの脳の防壁を破ろうとしている。ああ、防壁がどんどん薄くなっている。このままでは壁は必ず破られる……)

わかっていても、ふせぐ手段がわからない。受信器官が自分の脳にあるかぎり、ジュニアのテレパシーから逃れる術はない。いつか、必ず、捕らえられる。

ランがおののく間にも、二人の身体と周囲の床が、飛散した乳液とあふれた精液で白く染まっていった。

「……あああ……ランさん、また出ます!!」

床に広がる二人の美女の混合体液に、新たに耀の精液が混じった。
「ううあああっ！」
ランは自分がまた悲鳴をあげたのかと思った。だが声は自分よりも細く、脳をひっかく爪音の外から聞こえた。なにより、快楽の喘ぎでも、絶頂にうなされるよがり声でもない。あまりに悲痛で絶望にあふれた叫びだ。次々と反響する山彦のように、叫びは長々とつづいている。
「ああああああっ！」
声の主に気づいて、ランは首をねじった。
「耀！」
「ああああああああっ！」
ランの目に映ったのは、破壊された少年の容貌だった。ケイの膝の上で悲鳴をあげつづける耀の顔面の筋肉が、各々でたらめに収縮と弛緩をくりかえして、ありえない表情を次々と形作っている。裸体も激しく前後に動いて、背中を何度もケイの鋼鉄の胸に打ちつけて、皮膚が破れる音を鳴らしていた。
「ああああああああっ！」
「耀、どうしたんだ！　なにをされたんだ！」
叫ぶランの前で、耀の揺れる頭に、ジュニアのたくましい指が食いこんだ。自分の身体を分解しそうな首の動きが、握力で強引に止められた。

「ははははっ！　はじまりやがったぜ！」
「あっ、あがががああっ！」
停止させられた耀の歯がガチガチと鳴り、めくれた唇から狂犬のように唾液が泡となってあふれた。眼球が完全に裏返り、痛々しい白目が虚空をにらんだ。
耀の凄惨な顔をながめて、ジュニアがゲラゲラと笑った。
「いい顔をするじゃねえか、兄弟。感じるぞ。耀の脳の中で総統ゴードから与えられた記憶が覚醒したな。脳に変化が起きているぞ。おかげで俺と耀の間にテレパシーが通じるようになった。これで戦闘姫を製造する知識も俺のものにできるぜ」
「あがががああああっ……」
ひときわ高く吠えると、耀は口を大きく開いたまま沈黙した。ジュニアが頭から手を離すと、意識を失った裸体がケイの膝からずり落ちて、自分が放出した大量の精液溜まりの中に顔からつっこんだ。
「耀っ！　あひいいっ！」
どうにかして縛めから逃れようと身悶えるランの股間に、新たな触手が潜りこんだ。細い金属の先端が、尿道口を押し開いて無理に侵入してくる。膣よりも狭い粘膜の中で、快感パルスがスパークする。
「ひきいいいいっ！」
排泄物を出すために存在する器官の入口に、乳首や膣と変わらない快感が生まれ、尿道

から膀胱まで走り抜けた。想像もしなかった新たな性感の誕生で、ランの脳がさらに激しくシェイクされる。膣への刺激で知らず知らずのうちに膀胱に溜まっていた尿が、未知の肉悦の渦にかき混ぜられ、一気に暴走した。

「おおおおう、出る！　小便が出てしまうっ！　あああああおう！」

ぶしゃあああああ！

暴走した尿が、尿道口に入った触手を吹き飛ばした。ミリオンの腹の上で、金属の蛇がうねくる。ランの小さな肉の穴の縁がまくれて、猛烈な水流に打ち震えた。短い性の経験ではじめて放尿絶頂が、強化された肉体を凄まじい勢いで侵した。

「はおおおううっ！　イク！　イクイクう、小便でイッちゃうううううっ!!」

精液で子宮を満たされたお返しというように、ランは大量の小水をミリオンの全身に振りまいた。扇状に広がった透明な排泄液は、ミリオンの可憐な美貌にもたっぷりと浴びせられる。

「あぷっ、うぷぷ、ああっ、ダメ、おしっこをかけられているのに、イッてしまうう！　イクううううっ!!」

体液の交換とばかりに、ミリオンのペニスがまた射精した。大量の精液が膣から子宮を満たし、逆流してあふれかえり、さらにランを高みへ舞い上がらせる。

「あああああ子宮がいっぱいになるう！　イクっ！　また乳首から乳液が出るうっ、イッちゃうううっ!!」

小水でびしょ濡れになった美貌と純白の戦闘装甲の上に、新たに二筋の乳液が注がれ、淫靡な模様を描いた。
「そんなに大量に乳液が出るなんてすごいよね」
ランの耳に、ケイの声が入った。気がつくと、三人の姉妹にかこまれていた。三つの顔には、ギラギラした嗜虐の悦びが貼りついている。少なくとも総統ゴードのもとにいたときには絶対に表れなかった淫らな表情だ。
ランは思わず背筋を震わせて、三人にたずねた。
「あああ、な、なにをするつもりだ」
カヤとリズが黒と青の瞳を見合わせて、いかにも悪巧みをするように言い合った。
「これだけミルクが出るということは、ランの乳首の穴はよほど大きいのだな」
「こういうこともできるかもネ」
二人がそろって右手の人差し指を立てた。もちろん戦闘装甲をまとった鋼鉄の指だ。
「それっ！」
「ほらネ！」
ランの左右の勃起乳首に、鉄の指先が押しつけられる。乳液を出すために開いた管に、ズブリと指が入った。
人知を超えた衝撃が、左右の乳首から同時に伝わる。
「ひぎいいいいっ！」

乳首の中に強固な鋼鉄の指を挿入されるという、想像すらしたことのない現象が、自分の目の前で、自分の肉体で起こっている。
「ああ、ううううあああああ」
ミリオンも信じられない光景を間近に見せつけられ、目を見張るばかりだった。
乳液にこすられるよりも硬く、はるかに強烈な刺激が、胸を駆けめぐる。肉筒を内側から切られるような鋭い感触が、苦痛とも快感ともつかない未知のものを呼び起こした。
「ああああああ、ち、乳首、乳首がああああっ！」
カヤとリズの指が第二関節まで潜った。指先が乳房の中でぐねぐねと動き、肉をかき混ぜられる。
「あははは。ランの胸の中、すごく柔らかい！」
「それに、とっても熱くてグチュグチュしてるネ！」
カヤとリズはそろって指の動きを大きくした。肉の中でグルグルと回転させながら、前後にズブズブと動かした。指の動きにあやつられて、乳房が震え、よじれ、引き伸ばされてはつぶされる。
「い、いあ、が、ああああああ」
冷たい指に攪拌された乳肉がどろどろに融解して、大量の母乳が生成されていく。今までにない巨大すぎる圧力が、乳房を最高にふくらませた。
「ああああああ、出る、出ちゃうっ！　乳液が出るううっ！」

しかし出せない。乳首は指でふさがれたままだ。行き場を失った乳液が乳房の内側で轟々と渦巻き、また乳肉の性感を痛烈に刺激する。刺激されれば、さらに乳液の分泌が起こり、ますます圧迫と刺激が増大する。射乳をふさがれているかぎり、際限のない乳悦の連鎖が走っていく。

「おおおおお、おお、出させて！　乳首、乳液、出させてえ、おごううう！」

絶え間なく悲鳴をあげるランの口を、硬いものでふさがれた。

目の前に、ケイの戦闘装甲の股間がそびえている。以前のミリオンと同じく、股間の装甲が開いて、中から黒々とした人造ペニスが伸びていた。

ケイの黒い亀頭が、ランの口の中にギリギリとねじりこまれていく。

「あはははは。ラン、長いつきあいのわたしのペニスを咥えられて、すごくうれしいでしょう。ランの喉を突きまくってあげるよ」

「うごほおお！」

ケイが甲高い笑い声をあげて、腰を突き出した。太い亀頭が口から喉の奥へ潜りこみ、繊細な喉粘膜をえぐる。耀のペニスをフェラチオするときにも、これほど奥まで挿入されたことはない。ランのことをなにも考えずに、ケイは自分勝手に縦横無尽にペニスを突き立てる。

ランは絞殺される獣のような苦鳴を吐いた。

「うぶえっ、ぐうごごごおお！」

かつてのリーダーのうめき声を聞いて、三姉妹が笑いさざめく。
「あはっ！　はははははは！」
「くふっ、うふふふふふ！」
「キャヒヒヒヒヒヒヒヒ！」
人造ペニスに喉を突かれ、左右の胸の中を指でほじられ、膣を熱い肉棒に満たされる。
金属触手がクリトリスに噛みつき、尿道にまで快感パルスを打ちこまれている。
全身の感覚器を同時に嬲られて、あらゆる体液が沸騰する。ランは自分が浸っているものが快感なのか激痛なのか、判断もできなかった。いや、なにか考えることすら不可能だ。
あらゆる感覚が体内で荒れ狂い、脳がずたずたにされる。
絶頂とか、イクとか、言葉も意味を失った。
ただ、なにかが爆発した。
「喰らえ！」
ケイが吠えて、人工ペニスを食道にまで挿しこみ、白い粘液を噴出した。以前にケイ自身が放出した乳液を溜めたものだ。
同時に、カヤとリズが人差し指を思いっきり強く引き抜いた。乳首がめくれて裏返り、凄まじい破裂音を鳴らして乳液が飛び散る。
ミリオンも引きずられて、何度目かもしれない射精を暴発させる。
「おおおおおおおおおおおおおお!!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/